

過去の作品制作における自己表現の分析

前編（第1種～第2種）

伊藤 昭博

Analysis of the Self-Expression in My Art Works

Akihiro ITOH

はじめに（序論）

1988年の私の初個展（東京都神田 田村画廊）での作品発表以来、今年で20年目になる。これまでに個展、グループ展を東京や福岡の画廊、ギャラリーで開催し、野外での展覧会や熊本県小国町での滞在型公開制作の展覧会（Artists Camp in Aso）を企画し、同時に制作と作品展示を行ってきた。今回の研究紀要では、過去20年間に制作、発表した作品について写真を記載しながら、展覧会の内容を説明し、更に作品制作における自己表現の分析をしていくことにする。これまでの発表した作品について、客観的に自己の表現を分析することで、作者自身の制作における思考的プロセスを明らかにすることが可能であると考え。

これまでの私の展覧会の活動内容は、次の4種に分類することができる。

第1種は、武蔵野美術大学共通絵画研究室助手時代に開催した東京の画廊、ギャラリーでの個展、また、同大学資料図書館での助手によるグループ展（武蔵野美術大学助手作品展 ACT）

第2種は、別府大学に赴任後の福岡の野外スペースでの招待出品、商業施設での公募企画

展、福岡天神のギャラリーでの個展、長崎端島（軍艦島）でのグループ展

第3種は、熊本県小国町の様々な地域を会場に日本や韓国、インドの作家たちが滞在しながら制作を行う公開制作型のグループ展（Artists Camp in ASO）

第4種は、熊本県小国町宮原地区を会場とした小国美術倶楽部主催のワークショップを取り入れた展覧会企画である。

この活動報告は、第1種、第2種を[前編]、第3種、4種を[後編]とし、今回は[前編]の展覧会の内容について報告してみたい。

本 論

まず、第1種の展覧会の内容説明の前に最初の個展について述べたい。この時期は武蔵野美術大学造形学部油絵学科の学生で卒業制作展を終えたすぐの時である。

第1種 東京の画廊、ギャラリーでの個展、武蔵野美術大学助手作品展

関連作用

昭和63年3月28日～4月3日 東京都神田の田村画廊において個展を開催した。作品は昔の日本家屋の梁をおもわせる木を鉄板の穴に突き刺したもので鉄と木の関係性を表現した。



サイズ 3100mm×2000mm×930mm
素材 木、鉄、コ-ルタ-ル
場所 田村画廊(東京 神田)

* 木と鉄、この相対する素材を如何に扱うかによって、それぞれの素材の見え方に違いがある。昔の日本家屋の梁のように木のもつうねりや動きに逆らうことなく、曲がっていれば曲がったなりのフォルムを探りながら制作を進めていった。自然物の木の柔らかさと人工物の硬さや冷たさを感じる鉄板を対比させることで、現代社会の中での自然のもつ生命的エネルギーを表現していたように思う。

Sleepers Circle255

平成3年1月 東京都小平市の武蔵野美術大学の助手作品展において構内の敷地に立体作品を展示した。作品は線路の枕木を台形に切断したブロック255個をサークル状に積み上げ、作品の外側と内側を鑑賞できる構造になっている。

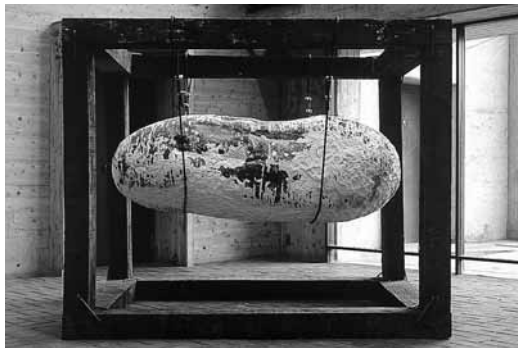


サイズ 1750mm×1750mm×1650mm
素材 枕木、チョ-ク
場所 武蔵野美術大学構内(東京 小平)

* 直線的な線路の枕木を台形状に加工したものを、自分を取り囲むようにサークル状に積み上げていくことで外側と内側の境界を作っていった。枕木のブロックを積み上げていくことで、視線が下方から上方に移動し、空を意識する作品となった。

The Earth Position - Vol .1 -

平成 3 年 1 月 東京都小平市の武蔵野美術大学の助手作品展において大学の資料図書館に立体作品を展示した。作品は枕木によりアングルを組み、そこに銀杏の木を卵形の形体に加工し、コルタールを染み込ませ、その上から石膏で覆い被せた作りになっている。



サイズ 2100mm × 1800mm × 1600mm
素 材 木、石膏、枕木、ワイヤ -
場 所 武蔵野美術大学資料図書館（東京 小平）

*この頃から人類がこれまでに見たことのないような物体が地中より掘り出されたイメージで作品を作りはじめた。また、枕木のアングルを組み、ワイヤーによって宙に浮かせて見せることにより物体のもつエネルギーや存在感を強調した。

The Earth Position - Vol 2 -

平成 3 年 10 月 7 日 ~ 12 日 東京都神田の秋山画廊において個展を開催した。展示内容は 6 本の銀杏、榎の木それぞれをまゆ状に加工し、それにコルタールを染み込ませ、石膏を塗り部分的に石膏で覆われた表面に傷をつけたり、剥いだりして木肌をむき出しにした作品を会場に設置した。この展覧会の評論は、美術手帳 BT の 1 月号の展評（P243）で紹介された。



サイズ 1800mm × 500mm × 500mm
素 材 木、石膏、コルタール
場 所 秋山画廊（東京 神田）

*展覧会の期間中、木に染み込ませたコルタールは時間の経過と共に、木の周りに覆った石膏の白さの中から浮かび上がり、茶褐色の物体へと変化していった。まるで地中から生まれたまゆが次の進化への準備をしているかのように見えた。

The Earth Position - Vol 3 -

平成4年1月 東京都小平市の武蔵野美術大学の助手作品展において大学の資料図書館に立体作品を展示した。

展示内容はまゆ状の形体に加工した木にコールタールを染み込ませ、その表面を石膏で覆い被せた作品4点を会場に設置した。



サイズ 1800mm×500mm×500mm

素材 土、石膏、コールタール

場所 武蔵野美術大学資料図書館 (東京 小平)

* 静かな展示会場の中でギリシャ彫刻の石膏像との対比で作品自体が生き物のように見え、時間の経過と共に動いているかのように目に映った。立体作品の場合、展示される周りの空間や光によって、様々な表情があり、また、見る人の視点によって見え方の違いがあることに気付く。

Coaltar Box

平成4年10月28日～11月2日 東京都西早稲田のギャラリー NW ハウスにおいて個展を開催した。展示内容は、まゆ状の形体に加工した木にコールタールを染み込ませ、その表面に石膏を覆い被せたもの4体それぞれを木枠の箱に入れ込み会場に設置した。



サイズ 2100mm×720mm×800mm

素材 木、石膏、コールタール、塩ビ板

場所 ギャラリー NW ハウス (東京 西早稲田)

* まゆ状の物体を木枠のアンクルに入れ込むことにより、箱の外側と内側の世界を表現しようとした。箱の中に入れる行為は、得体の知れない物体を隔離するという反面、外敵から物体を守るという側面も意味する。内と外(表と裏)という立場の違いで物事の見方は反転し、この相対する関係性の中で作品は成り立っている。

Coaltar Window

平成 5 年 1 月 東京都小平市の武蔵野美術大学の助手作品展において大学の資料図書館のエントランスでインスタレーションを行った。展示内容はエントランスのウィンドウ全面に塩ビ板上にコールタールでドローイングしたもの 8 点を設置した。



サイズ 4610mm × 3645mm × 2030mm
素 材 コールタール、クレオソート、塩ビ板
場 所 武蔵野美術大学資料図書館（東京 小平）

* エントランスのウィンドウは一種の箱部屋状態になっており、人は建物内に入ったり、出たりするために、この空間を通過することになる。視覚的に茶褐色にドローイングされたウィンドウを捉えながらコールタールの臭いを嗅ぎ、空間を移動することで、建物の外側と内側の世界を強く意識することになる。

The Earth Position - Vol 4 -

平成 5 年 3 月 8 日 ~ 13 日 東京都神田のときわ画廊において個展を開催した。展示内容は銀杏の木をまゆ状に加工したものにコールタールを染み込ませ、その表面に石膏を覆い被せた立体作品 2 点を会場に設置し、壁面には塩ビ板上にコールタールでドローイングしたもの 8 点を設置した。



サイズ 1000mm × 1800mm × 1000mm
素 材 木、石膏、クレオソート、コールタール
場 所 ときわ画廊（東京 神田）

* 床に置いた立体作品と壁面のドローイングを一種の記憶の風景として捉えインストールを行った。ドローイングは視覚的に見えるだけでなく、立体物のもつ見えない根源的エネルギーを表現した。

第2種 別府大学赴任後、福岡の野外スペース、商業施設でのグループ展、福岡の画廊、ギャラリーでの個展、長崎端島（軍艦島）でのグループ展

Cost-off Skin

平成5年11月 東京都西早稲田のギャラリーNWハウスにおいて個展を開催した。展示内容は銀杏の木をくり抜いたもの4体を組み合わせた壺形の作品と2本の木を組み合わせた舟形の作品を会場に設置した。



サイズ 1600mm×1000mm×1000mm
素 材 木、クレオソート、石膏
場 所 ギャラリーNWハウス（東京 西早稲田）

*この頃から木の塊の重量感より脱け殻的な存在感のようなものに興味をもち、木をくり抜きはじめる。また、くり抜いた木を組み合わせることのできる形態に植物の種のようなイメージを重ねた。

Cost-off Skin in Uminonakamiti Seaside park

平成6年9月11日～11月27日 福岡県の海の中道海浜公園で開催された第3回アジア現代彫刻会の主催する展覧会に招待作家として出品した。展示内容は公園内の松林の中に立体作品3点を設置した。この展覧会の評論は読売新聞に記載された。

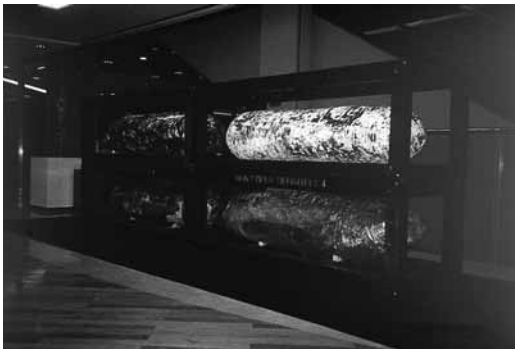


サイズ 1600mm×1000mm×1000mm
素 材 木、クレオソート、石膏
場 所 海の中道海浜公園（福岡）

*これまでの室内での展示空間とは違う野外の空間では最初に場所探しからはじめることになる。自然の場のもつ力に触れ、その空間の中で自分の作品を存在させる意味を探ることになる。作品をただ設置するのではなく、あたかも以前からその場所に存在してたかのような空間作りが重要である。

Don't Open Definitely

平成6年9月21日～10月17日 福岡県天神のイムズビル内で開催された「第6回コンテンポラリーの冒険」の公募展に入選し、立体作品を展示した。展示内容は、木組みの箱を2段重ねにし、その中にまゆ状に加工した木にコールタールを染み込ませ、石膏で覆い被せた作品を会場に設置した。



サイズ 4200mm×1440mm×800mm
素材 木、石膏、コールタール、ポリエチレン
場所 天神イムズ(福岡 天神)

* 得体の知れない物体を木組みの箱に入れ、陳列することで商業施設内での美術作品がどのように人々の目に映り、反応があるのか興味をもった。本来、展示空間でない場所で美術が成立し得るのかといった問いかけでもあった。

Time .1994

平成6年10月 長崎県の端島(軍艦島)において大分在住の美術家3名で展覧会を開催した。展示内容は廃墟となった建物より探し出した碇子や木箱、古時計などを表現材料に炭坑跡地でインスタレーションを行った。この展覧会の評論は長崎新聞に記載された。



サイズ 1200mm×700mm×700mm
素材 碇子、古時計
場所 軍艦島(長崎 端島)

* この島は、現在、無人島である。かつて炭坑が繁栄した頃には周囲2Kmほどの小さな島に約5000人の人々が暮らし、小学校や病院、映画館、理髪店など生活に必要な施設はすべて揃い、当時としては珍しい110階建てのコンクリートのビルが隣接して建ち並び、海に浮かぶ様子がまるで軍艦のように見えたことから軍艦島と呼ばれるようになった。この展覧会では、当時使用されていたもの(碇子や古時計など)を表現材料にインスタレーションを行うことで、高度成長化時代の象徴ともいべき炭坑の繁栄とエネルギー源の移行に伴う炭坑の閉山の中で、そこで生活していた人々の残像を島の風景と作品を一体化させることで表現する試みであった。

March13 31

平成7年3月13日～31日 福岡県赤坂のマニファクトリーギャラリーにおいて画廊企画の個展を開催した。展示内容は鉄のアンクルの中に紡錘形状に加工した木に無数の穴を空け、その表面に白いペンキで着色した立体作品を設置し、もう一方は、鉄のアンクルの角に紡錘形の立体を立てて設置した。この展覧会の評論は読売新聞、朝日新聞に記載された。



サイズ 2000mm×700mm×700mm (作品手前)
素 材 木、ペンキ、鉄
場 所 マニファクトリーギャラリー
(福岡 赤坂)

*私の場合、一本の木から作りだされる形態として紡錘形が現れるのは、山や林から切り出された、行き場(生き場)のない木たちに生命を宿らせることではないかと思う。これは、私自身が制作しているにも関わらず、根源的な人間のもつ遺伝子がここに存在しているからに他ならない。この展覧会では、人工的な鉄のアンクルと自然の木から作り出された紡錘形の形態を組み合わせることで、近代社会の中で、人間そのものがもつ古代から受け継いできたであろう精神性を表現した。

nutshell

平成9年4月28日～5月11日 福岡県天神のギャラリー アートスペース獺の企画で個展を開催した。展示内容は銀杏の木で種状の形体を作った立体作品と壁面に設置したワシントニアパームのオブジェで構成されている。この展覧会の評論は読売新聞に記載された。



サイズ 1550mm×950mm×950mm (作品手前)
素 材 木、ペンキ
場 所 アートスペース獺(福岡 天神)

*私の作品制作において素材との出会いは重要である。形態や質感、重量感、すべてにおいて、その素材のもつ力を借り、自分のイメージするフォルムを探し、作り出していくことで私自身が作品と出会うことができる。

水の箱

平成13年9月10日～23日 福岡県天神のギャラリー アートスペース 獺の企画で個展を開催した。木の箱の組み合わせにより何人かの人が入れるような空間を作り、箱の所々に日常の風景や水族館の水の中の生き物の写真を配置し外側と内側の世界を鑑賞者に体感してもらった。

真が見える仕掛けになっている。水族館自体も水の入った箱であり、そこには内と外の関係性があり、見るものと見られるものとの関係性がある。この作品である「水の箱」においても同様のことが言えるのである。

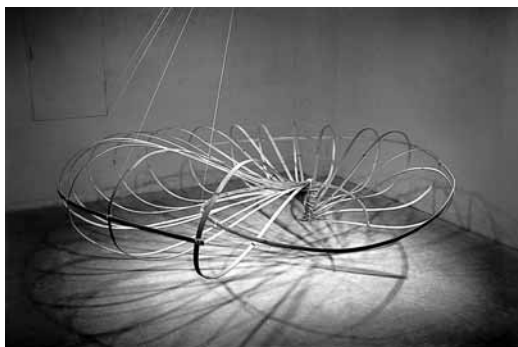


サイズ 2100mm × 2500mm × 2100mm
素 材 杉板、OHP シートに写真プリント
場 所 アートスペース 獺 (福岡 天神)

* 箱には以前から興味があった。限られ空間の中で内と外の関係性であったり、蓋を閉じたり、開けたりすることで、見え隠れする世界であったりという具合に内と外の両方を行き来することによって生まれる現実と非日常の世界に身をゆだねることは、心地よいものである。この作品では、私自身も含め鑑賞者が実際に入れるような大きな箱状の部屋を制作し、その箱の出入りの中で見えてくるものを体感してもらえようような構造になっている。大きな箱は杉板を箱型に組んだものをいくつも積み重ねて部屋状に組み立て、それぞれの小さな箱型の窓には水族館のアザラシやクラゲの泳ぐ姿のスライド写

Cast-off Skin

平成20年9月10日～21日福岡県天神のギャラリー アートスペース獺の企画で個展を開催した。展示内容は Cast-off Skin (抜け殻) と題し、竹を割ったものを曲線的に組み合わせたアンモナイト状の形態を会場において制作した。作品は天井より糸によって吊るしてあり、鑑賞者は自由にそれを回したりすることで、作品のいろんな表情を体感できるようになっている。また、会場に隣接しているカフェには作品のマケット(模型)を天井より吊るし、自然の風によって回る様子を鑑賞してもらった。この展示会の模様は読売新聞の文化面に記載された。



サイズ 2200mm × 2200mm × 2300mm
素 材 竹、麻糸、ナイロン糸、ステンレス製金具
場 所 アートスペース獺(福岡 天神)

* 自然界の中において生き物たちが作り出す抜け殻や巣などのフォルムはどれも魅力的であり、形に無理がない。果たして人間界においてそのようなフォルムを作り出すことは可能であろうか? この展示会では、「Cast-off Skin 抜け殻」と題し、線によって組み合わされたアンモナイト状の形態が宙に浮き、回ることでできる抜け殻のフォルムと記憶の残像を表現しようとした。

まとめと考察

以上が前編(第1種～第2種)の展示会の活動内容を自己分析したものであるが、展示会の会場によって作品の内容は変化し、特に野外での展示の場合は、その土地の風土や気候、そこに見える風景によって素材の選択から始まり、作品の形態や大きさ、展示方法が決まってくる。展示された作品は、その風景の一部となり展示される時間の中で様々な表情を見せることになる。私の場合、多くが木や竹などの自然物を素材として使うので、たとえその場所に長い時間、設置していたとしても作品の形態や色は変化し、いずれ朽ちていくであろうが、自然界にある以上、土に還っていくのが本来の姿でないかと思う。また、表現形態や、それを表現するために扱う素材は、私自身の根底にあるものを如何に見据え、どう引き出せるかによって違ってくるように思う。つまり、私自身の体が記憶している感覚的なものであったり、私自身に組み込まれた遺伝子の記憶をどこまで辿り出せるかということではないかと思う。これまでに私が作品をある場所に置く行為は、その場所に私が関わったことで、ある一時期そこに一つの風景を創り出すことだと考えている。風景というものは、現象的でもあり、時間と空間を人々がそこに存在することによって、その人たちが捉えている視点である。視点の違いによって捉える風景は各々異なっているかもしれないが、そこでの空気感は共有しているように思う。その意味においては、風景の中に作者やそこを訪れた人々、そして作品もが取り込まれて一つの風景という世界を創り出しているのである。

以上のように、これまでの私の作品制作において再認識したことは、作品自体が私自身の記憶の奥にある原風景的なものがベースになっていることは間違いがないが、それを取り巻く環境、つまり作品と一体化した風景を私自身が見たいという欲求の上に成り立っていることである。今回、これまでの作品を写真によって見て

もらったが、ほとんどの作品は残っておらず、写真による記録を残していくことで、過去の作品制作において、何を思考し、表現しようとしていたのかが客観的に見えてくるような気がする。今後もこれまでの経験を生かし創作活動を続けていくつもりである。